



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語と韓国語補助動詞の意味拡張における通時的対照研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	一色, 舞子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11174号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55571
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Maiko_Isshiki_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 一 色 舞 子

学位論文題名

日本語と韓国語補助動詞の意味拡張における通時的対照研究

本論文は、全 7 章から構成されている。第 1 章では序論として、研究の背景や研究目的、研究方法を述べており、第 2 章では日韓両言語における先行研究を、次の第 3 章では補助動詞認定に関わる意味・用法の分類を行うなど、論を展開していくにあたっての筆者の立場を明らかにしている。第 4 章から第 6 章までは本論として、歴史的文献からの資料に基づき、各時代における当該補助動詞の意味・用法を綿密に分析・記述したうえ、補助動詞が含まれる動詞連続構造における先行動詞 V1 の形態的特徴や、後行動詞 V2 における意味的変遷について述べている。最後に第 7 章では結論として、日韓両言語の補助動詞を含めた動詞連続構造における V2 の形態的・意味的な歴史的変遷を総括し、さらに予想される今後の研究展開についても言及している。

以下、章ごとのより詳細な内容である。

第 1 章「序論」は、1.1 研究の背景、1.2 研究の目的、そして 1.3 研究の方法の三節で構成されている。1.1 研究の背景では、従来の先行研究を日本語、韓国語、そして日韓対照研究の順に概略を述べ、それらを批判的に検討した後、本稿における通時的観点を導入した対照分析の有効性について述べている。次の 1.2 研究の目的では、本稿における研究目的を述べ、最後の 1.3 研究の方法では、本稿において研究対象とする日本語の「-おく」、「-しまう(しまふ)」、韓国語の「-twuta/nohta」、「-pelita(pAlita)」の概略、その選定理由、さらに、日韓両言語における補助動詞の意味拡張の方向性を検証するにあたり、文法化に伴って生じる意味変化である「主観化」、「間主観化」を念頭に置き、補助動詞が意味拡張する要因及びメカニズムを明らかにする旨を述べている。

第 2 章「先行研究」は、2.1 日本語の補助動詞に関する先行研究、そして 2.2 韓国語の補助動詞に関する先行研究の二節で構成されている。2.1 日本語の補助動詞に関する先行研究では、従来の現代日本語補助動詞研究における論点を提示し、紹介している。また、日本語の複合動詞及び補助動詞の歴史的展開を論じる先行研究についても触れ、動詞間の結合度を決定づける言語学的指標の有効性、特に形態・統語的側面における結合度と意味的側面における結合度の関連性について検討する旨を述べている。2.2 韓国語の補助動詞に関する研究では、主に韓国語補助動詞における歴史的な研究を取り上げている。これらの先行研究において補助動詞の成立時期に関して統一見解に至っていないという問題点を挙げ、以上のような先行研究に批判的検討を加えながら本稿における主張を展開する旨を述べている。

第 3 章「本稿での立場」は、3.1 補助動詞について、3.2 日本語の V2「おく」及び韓国語の V2「twuta/nohta」の意味用法、3.3 日本語の V2「しまう(しまふ)」の意味用法、3.4 韓国語の V2「pelita(pAlita)」の意味用法で構成されている。3.1 補助動詞については、従来の先行研究を参照し、本稿における補助動詞の認定基準を設定し、補助動詞の定義づけを行っている。次に続く節からは、日韓両言語における補助動詞を含めた V2 の意味的変遷を明らかにする上で土台となる各 V2 の意味用法について考察している。日韓両言語における先行研究を参照しつつ、さらに本研究において調査した歴史的資料からのデータを基に意味用法を検討し、具体的な用例とともに提示している。

第 4 章「日本語の場合」は、4.1 日本語の「-おく」と 4.2 日本語の「-しまう(しまふ)」の二節で構成されており、日本語の「-おく」の場合は上代日本語から近世日本語にかけて、日本語の「-しまう(しまふ)」については近世日本語において観察される用例を基に、それらにおける V1 の特性及び各 V2 の意味用法を時代別に分けて考察している。V1 の特性に関しては、まず各 V2 に前接する V1 のヴァリエーション、V1 の形態的特徴そして V1 の自他の三点について検討しており、用例数と全体に占める割合を提示することによって、V1+V2 における結合制約及び V2 の生産性について考

察している。V2の意味用法については、第3章「本稿の立場」において検討した意味用法を基に、各時代別にどのような意味用法を持つ用例が観察されるかを用例とともに提示することにより、各V2における意味的変遷について考察している。

第5章「韓国語の場合」は、5.1 韓国語の「-twuta」、5.2 韓国語の「-nohta」そして5.3 韓国語の「-pelita(pAlita)」の三節で構成されている。韓国語の場合、日本語のようなV1の形態的変遷がどの場合も観察されなかったため、15世紀中世韓国語から18世紀近世韓国語にかけて観察される用例を基に、各形式におけるV1のヴァリエーション、V1の自他によって結合制約及び生産性について検討し、各V2の意味用法についても、日本語の場合と同様に第3章本稿の立場において検討した意味用法を基にして、各時代別にどのような意味用法を持つ用例が観察されるかを用例とともに提示することにより、各V2における意味的変遷について考察している。

第6章「日本語と韓国語の「V-V」構造における歴史的変遷」は、6.1 日本語のV1における形態的変遷、6.2 日本語のV2における意味的変遷、6.3 韓国語のV2における意味的変遷の三節で構成されている。本章では第4章と第5章にて検討した日本語におけるV1の形態的変遷と日韓両言語におけるV2の意味的変遷を辿り、意味的変遷においては本動詞の語彙的意味からV2の各意味用法がいかにして派生したのかを明らかにしている。さらに本稿において収集したデータに裏付けされた各V2の意味的変遷を基に、補助動詞としてのV2における意味拡張の過程を明らかにしている。

第7章「結論」では、本稿において明らかとなった日本語と韓国語の補助動詞を含めたV2の形態的・意味的な歴史的変遷を総括し、最後にこれまで論じられてきた二つの動詞の連続における動詞間の結合の強弱について言及している。日本語における動詞間の結合を論じる際、これまで形態音韻論的、統語論的指標のほか補助動詞化のような意味論的指標も有効であるといわれていたが、本稿において検討した結果、補助動詞化のような意味論的指標と統語論的指標による結合度の強弱は必ずしも連動していない場合もあることを明らかにし、個々の事例を個別に検討すべきである旨を述べた。また、韓国語においても意味論的指標のほか統語論的指標による動詞間の結合度の議論が可能である旨を具体例の提示とともに言及し、韓国語の動詞連続においても発展的に継承することが可能であるという展望を述べた。